

—— 目 次 ——

インド仏教学の現状と文献利用の可能性 …………… 403

第9回 佛教図書館協会研修会 講演・講義録

平成17年3月31日 発行

当 番 校 同朋学園大学・愛知学院大学

第9回佛教図書館協会研修会

インド仏教学の現状と文献利用の可能性〈講演〉

同朋学園大学助教授 福田 琢

I. 1990年代以降の仏教学の新しい局面

A. 新たな研究分野の開拓／現代社会の課題と仏教

- (1) 生命倫理：脳死・臓器移植問題、ビハーラ(仏教ホスピス)運動
- (2) 環境問題：シンポジウム『仏教と自然』(1990) The Value of Nature in Buddhism(1999)
- (3) 福祉活動：BNN(仏教NGOネットワーク)
- (4) 現代思想：哲学・社会学と仏教、仏教心理学(トランスパーソナルとの接点)など

B. 伝統的仏教学への新たなアプローチ／技術・方法・資料

- (1) 電子化：『大正新修大蔵経』テキストデータベース (<http://www.lutokyo.ac.jp/~sat/japan/index.html>)
スリランカプロジェクト (<http://jbe.gold.ac.uk/>)
ACIP, Asian Classics Input Project (<http://www.asianclassics.org/>)
インド学仏教学論文データベース (<http://www.inbuds.net/>)
- (2) 方法論：律蔵研究の進展、考古学的資料の併用
グレゴリー・ショペン・小谷信千代

訳『大乘仏教興起時代 インドの僧院生活』春秋社、2000年。

佐々木閑『インド仏教変移論——なぜ仏教は多様化したのか』大蔵出版、2000年。

- (3) 新資料：写本研究との連帯

II. 近代仏教学＝文献学

C. 『広辞苑』第四版

文献学(philologieドイツ)(上田敏による訳語)文献の原典批判・解釈・成立史・出典研究を行う学問。また、それに基づき民族や時代の文化を研究する学問。言語学の意にも用いる。

D. 梶山雄一「仏教学とわたくし」(『空の思想 仏教における言葉と沈黙』人文書院、1983年、あとがき)

文献学(philology)ということばはかなり曖昧に使われている。しかし一般的には、言語学(linguists)よりは思想性・歴史性を重視し、哲学(philosophy)の独立した思弁性や論理性に対すれば、文献の客観的解釈により力を注ぐものである、と考えられているようである。もとより、文献学の理想は、確実な語学的・歴史的な解釈の上に、文献の思想内容を解明することであろう。

現代の仏教学は仏教文献学である。西欧のインド文献学というものは、十八世紀以

来、西欧のギリシア古典やキリスト教の文献学の修法をインド古典に適用することから始まった。仏教学はそのようなインド学の一分野として生成してきた。仏教の文献はチベット語・漢訳その他、インド学の領域をはみ出す文献を含み、また伝播の歴史もインド外の高大な地域にわたっているから、現在では仏教学はインド学から独立した科目になっている。しかし研究の手法そのものはインド文献学のそれを受けついできている。

仏教の開祖であるゴータマ・ブツダの研究を例にとってみると、それははなはだ奇妙なものである。パーリ聖典・漢訳阿含・サンスクリットやその他の諸語に残る経典など、現代のわれわれが見ている原始仏教の資料は、実は、大部分が西暦紀元ころから後に筆記され、成文化されたものである。ゴータマ・ブツダ(前四六三～三八三ころ)はみずから著作はしなかった。彼の教えは、その後数世紀のあいだ、弟子から弟子へと口承によって伝えられてきた。西暦紀元ころになってやっとその教えはパーリ語に記されるようになった。ブツダの教えが漢訳され始めたのは後二世期中葉であり、サンスクリットその他の原語で残るブツダの記録も、漢訳より古いとは言えない。

インド人は現代でもあまり書物を信用しない。伝統的な宗教者や学者は、書物に記されていることよりも、自分が師の口から伝えられたことの方を尊重する。

III. インド仏教学における文献研究の現状

E. 巴・漢・蔵資料

【パーリ語文献】パーリ語は古代インドで用いられていた俗語・方言の一種であり、標準語としてのサンスクリット(梵語)と対をなす。パーリ語で記録された聖典はすべて部派仏教(いわゆる「小乗仏教」)の一派に属し、

スリランカに伝えられた。それらは1881年にロンドンに設立された「パーリ聖典協会」(Pali Text Society, = P.T.S)からローマ字校訂出版され、初期仏教研究の標準テキストとされている。

【漢訳文献】漢文仏教聖典として今日標準的に用いられているのは1924年から1934年にかけて刊行された『大正新脩大蔵経』である。前半35巻が印度撰述部に相当し、インド仏教聖典の翻訳を収める。

【チベット語文献】チベットへの仏教受容と聖典の翻訳は7世紀前半よりはじまる。チベット大蔵経は聖典(経)と戒律文献(律)を収めるカンギユル(甘殊爾)と、注釈・論書および歴史・文化に関わる諸学問の文献を収めたテンギユル(丹殊爾)からなる。インド文献の翻訳は大乗の典籍が中心だが、部派仏教の律蔵が豊富に収められており、原典のない漢訳経典の原型を探るためにも重要視されている。現在最も標準的に用いられているのは、1954年から1962年にかけて刊行された『影印北京版西藏大蔵経』151巻である。

F. サンスクリット写本の発見と研究

1837年イギリスのネパール駐在員だったホジソン(B. H. Hodgson)、サンスクリット聖典380点余りをヨーロッパに送る。これを整理したフランスのビュルヌフ(E. Burnouf)は1852年に『法華経』フランス語訳を出版。以後、バンドール、シルヴァン・レヴィといった欧州の学者、あるいは我が国の高楠順次郎、榊亮三郎らによってネパール写本の蒐集が始まる。

1900年代英国のスタイン(1899-1929)、フランスのペリオ(1906-1909)、ドイツのプロ

イセン探検隊(後述4)、我が国の大谷探検隊(1902-1914)など、各国の探検隊が競って中央アジアへ足を踏み入れ、考古学資料とともにサンスクリット仏典を発見。多くは断簡であるが、既に失われたと思われていた重要文献の原典も多い。

『トルファン出土梵語写本目録

(*Sanskriithandschriften aus den Turfanfunden*)』

グリュンヴェーデル、ル・コックらのドイツ・プロイセン王位トゥルファン探検隊(第1次 1902-1903, 第2次 1904-1905, 第3次 1905-1907, 第4次 1912-1914)が蒐集した「トゥルファン出土サンスクリット写本」は、総計(ごく断片的なものも多いが)数千点に及ぶと言われ、現在はベルリンの科学アカデミーに保管されている。それらの資料はゲッチンゲン大学を中心とするグループによって整理され、1965年以来、順次に目録が刊行されている。そこには資料の概況に加えて、本文の厳密な校訂テキスト、対応經典の調査結果なども記されており、たんなる「目録」の域を越えた研究資料となっている。

〈*Sanskriithandschriften aus den*

Turfanfunden 既刊リスト〉* Franz

Steiner Verlag, Stuttgartより出版

Teil 1: カタログNr.
1965. (ISBN: 3-515-01154-4)

Teil 2: カタログNr.
1968. (ISBN: 3-515-01155-2)

Teil 3: カタログNr. 0802-1014.
1971. (ISBN: 3-515-01156-0)

Teil 4: 既刊行分の訂正・補遺
1980. (ISBN: 3-515-02843-9)

Teil 5: カタログNr. 1015-1201.
1985. (ISBN: 3-515-03022-0)

Teil 6: カタログNr. 1202-1599.

1989. (ISBN: 3-515-03023-9)

Teil 7: カタログNr. 1600-1799.

1995. (ISBN: 3-515-05404-9)

Teil 8: カタログNr. 1800-1999.

2000. (ISBN: 3-515-07205-5)

Teil 9: カタログNr. 2000-3119.

2004. (ISBN: 3-515-07346-9)

1931年 現在のインド・パキスタン間の国境紛争地帯に位置するギルギットの仏塔跡から約3000葉の樺皮写本(紙写本を一部含む)、いわゆる「ギルギット写本(Gilgit Manuscripts)が出土する。これらはN. Dutt, Gilgit Manuscripts, Vol. I-IV. Calcutta, Srinagar. 1939-1959として出版されたほか、数種の刊本として出版されている。

G. 近年の新発見

1979年の旧ソ連によるアフガニスタン介入に始まるアフガン内乱の結果、1980年代後半には世界の古写本市場に膨大なアフガニスタンおよびパキスタン出土文献が流出し、欧米の研究機関あるいはコレクターに引き取られる。

【Early Buddhist Manuscripts Project】

1944年、大英図書館(The British Library)は、ハッタ(ジャラハバード付近)から出土した土器の壺のなかから発見されたとされる白樺樹皮の29巻の巻物入手した。この写本はサンスクリット語ではなくガンダーラ語で書かれており、文字もいわゆる「梵字」の原型となるブラーフミー文字ではなくカローシュティー文字が用いられている。言語・文字の年代的特徴から紀元後1世紀ごろに書かれたと推定され、現存する仏教文献、もしくはインド文献としては最古

のものになることからメディアにも報道された(New York Times, 1996年7月7日)。その研究は米国シアトル・ワシントン大学(University of Washington)のサロモン(Richard Salomon)に委ねられ、サロモンはEarlyBuddhist Manuscripts Projectを組んで研究を進めている。壺の表記からこの文献は法蔵部(Dharmaguptaka)に所属していたと推定され、以下のような内容からなる。(参考文献: 榎本文雄「最古の仏典」『NHKスペシャル・ブツ大いなる旅路1: 輪廻する大地・仏教誕生』、日本放送出版協会、1998年、pp.63-68)

- (1) 阿含経典とその注釈(『長阿含経』とその注釈、『増一阿含経』)
- (2) 韻文経典(『スッタニパータ』『ダンマパダ』)
- (3) アビダルマ文献(仏教哲学文献。部派仏教、いわゆる「小乗」仏教学派の教義書)
- (4) アヴァダーナ文献(部派によって創作された仏教説話)
- (5) その他、諷仏文学作品

〈既刊リスト〉* 版元はいずれも Seattle : University of Washington Press.

Richard Salomon, *Ancient Buddhist Scrolls from Gandhara*, 1999. (ISBN : 0-295-97769-8)

Gandharan Buddhist Texts

1. Richard Salomon, *A Gandhari Version of the Rhinoceros Sutra*, 2001. (ISBN : 0-295-98035-4)
2. Mark Allon, *Three Gandhari Ekottarikagama-Type Sutras*, 2002. (ISBN : 0-295-98185-7)
3. Timothy Lenz, *A New Version of*

the Gandhari Dharmapada and a Collection of Previous-Birth Stories, 2003. (ISBN : 0-295-98308-6)

【Schøyen Collection】 1990年代、ノルウェーの企業グループのオーナーであり、写本蒐集家であるマーティン・スコイエン(Martin Schøyen)によって引き取られた膨大な仏教写本群は、アフガニスタンのバミヤン渓谷北部の洞窟の中で、原理主義勢力に追われたアフガン難民によって発見されたものという。それらはターラ椰子の葉(貝葉)、白樺樹皮、動物の皮を用いており、使用された文字は紀元2世紀のものから8世紀に遡る。大部分は破損した断簡であったが、サンスクリット語あるいはガンダーラ語の仏典が書写され、その総量は微小破片も含めて1万点以上にのぼる。1997年、オスロ大学のブロールヴィック(Jens Braarvig)、ミュンヘン大学のハルトマン(Jens-Uwe-Hartmann)、ベルリン・インド美術館の学芸員ザンダー(Lore Sander)と佛教大学の松田和信が共同研究を開始。その詳細については松田の報告に詳しい(『月刊しにか』1998年7月号、『東洋学術研究』38巻1号、『佛教大学総合研究所報』13,15,17号、『中外日報』2000年4月27日付)。すでにその一部がオスロで刊行されているが、研究機関などへの寄贈はなく、また日本からの直接の注文は受け付けず、マルショウ貿易のみが扱っているので注意(Eメール: malshow@beige.ocn.ne.jp, tel.0468-22-4072, fax : 0468-27-0389)。

Manuscripts in the Schøyen Collection I (Buddhist Manuscripts, vol. 1) Hermes Publishing, Oslo, Norway, 2000.

Manuscripts in the Schøyen Collection III (Buddhist Manuscripts, vol. 2)

Hermes Publishing, Oslo, Norway, 2002.

H. 現在のインド仏教文献学の共通関心

- (1) 最古の仏典とは何か。文献学はゴータマ・ブツダの根本思想にどこまで迫れるか。
- (2) 仏教はなぜ様々な学派・宗派に分岐したのか。その共通性と相違性はどこにあるか。
- (3) 大乘仏教はどのように興起したか。小乗／大乘をめぐる従来の仏教史観の見直し。